

あったという先行研究の指摘を確認する。この点で、セネガルにおけるギネの強い需要がボンディシェリの繊維産業の発展を導いたとし、これが「工業化の時代における非ヨーロッパ製品のグローバルな生存」(p. 249)という今後の研究アジェンダにつながるとする。そして、最後に、多元的グローバル化として、西アフリカと南アジアの連関がギネと宝貝に見出すことができるとしている。

本書の最大の貢献は、インド製綿布の貿易に関連する一次資料を用いて、イギリスとフランスの商人を媒介とした西アフリカと南アジアの連関を明らかにしたという点にある。西アフリカ沿岸部で奴隷、あるいはパームオイルやアラビアゴムなどの入手のために、西アフリカで需要の高かったインド製綿布を輸出する必要があったこと、特に西アフリカの消費者が綿布の品質に大きな関心をもっていたことを明らかにしたことは、西アフリカの消費者のエージェンシーを明解に示している。

また、本書は西アフリカの「合法的」貿易についての概観とともに、脚注に最新の研究を含む膨大な先行研究を明示しており、異分野の研究者や初学者にとって、この分野の研究の現状を知るための基盤を提供している。

もちろん、本書にもいくつかの問題点は指摘できる。たとえば、第1章で同時代の西アフリカのジハード運動をまとめているが、ソコト・カリフ国による沿岸後背地への奴隷の供給という点以外は論旨にはほとんど関連していない。また、肝心の西アフリカの消費者がどのような人々であったのかは具体的に述べられておらず、ギネの選好の理由も日差

しからの保護や顕示的消費などの一般論にとどまっている。西アフリカの人々のエージェンシーは、西アフリカの諸社会のなかでの意義についてはほとんど検討されず、ヨーロッパ商人への影響という点でしか感知されていない。

とはいえ、これらはグローバルな連関に焦点をあてた本書には無い物ねだりだろう。むしろ、ローカルな歴史を対象とする研究者が本書のようなグローバル・ヒストリー研究の成果を学び、こうした研究者と連携して、グローバルとローカル双方の視点を踏まえた論点を深めることが求められている。評者には、このことが本書から強く感じられた。

服部志帆編。『霊長類学者 川村俊蔵のフィールドノート—1950年代屋久島の猟師と後継者たち』南方新社、2021年、389 p.

大坂桃子*

フィールドワーカーが調査現場で得た情報を記録したものを、フィールドノートという。本書は、日本の霊長類学のパイオニアのひとりである川村俊蔵(1927–2003年)が、1952年と1953年にニホンザルの調査地と実験用サルの手当地開拓のために鹿児島県本土の南方に位置する屋久島を訪れた際のフィールドノート(以下、川村ノートとする)を読み解いたものである。のちに屋久島は、霊長類研究の世界的拠点となり、現在に

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

至るまで数多くの重要な研究が蓄積されてきた。その第一歩となった70年前の記録、計5万4,691字の解読に挑み、それをとおして、川村が当時屋久島の自然や人々とどう向き合ったのか、さらには当時の屋久島の自然のあり様や、自然と深く関わる人々がどう生きたかまでをも描き出したのが本書である。

本書は、第1章「川村俊蔵のフィールドノートの全容—サル・民俗知識・方法論・生態人類学に関する一考察」と第2章「後継者の語る1950年代の屋久島と野生動物—猟師はどのような人々であったか」の2章で構成されている。各章には、資料として、著者である服部志帆氏と小泉都氏によって解読された川村ノートの内容、および、50年前に川村が聞き取りをおこなった猟師たちの後継者に対する著者と小泉氏のインタビュー録が掲載されている。

第1章では、まず川村ノートの全容が示される。川村の調査は、同じく日本の霊長類学のパイオニアのひとりである伊谷純一郎(1926–2001年)とともにおこなわれた。サルを観察する機会には十分恵まれなかった中で、聞き取り調査や猟に関する野外調査がメインとなっている。情報提供者は40人で、多くが猟師であった。記録された内容は、サルの社会、生態に関することから、サルに関する方言、猿害、猟や利用法に至るまで、多岐にわたる。それらの内容をもとに、著者は4つの考察をおこなっている。

第一に、ヤクシマザルの社会、生態についての考察である。川村・伊谷は、人為的な森林の分断化が進みつつあった本州や九州では

見られない連続した森が屋久島には存在していることに注目し、そこでの群れの特徴や連続性、テリトリアリティ、群れ間関係等に関心をもっていた。猟師の語りから、そうしたヤクシマザルの社会、生態に対する多くの民族動物学的知見が得られたことが示されている。第二に1950年代の猟師の民俗知識とその背景についてである。屋久島の猟師は、それぞれが利用する慣習的猟区において、その地域のサルに対する詳細な知識をもっていた。その背景となったのは、古くからのサルの食用・薬用利用に加え、動物園や実験用サルの供給といったサルに対する島外からの高い需要であったと論じられている。

第三に、川村の方法論についてである。著者は、川村がもつ野生動物と人との関わりへの広い関心が土台となって、「研究対象やテーマに限らない多様な情報を異なる立場の人たちに聞く」(p.106)という川村の方法論が確立されたことを指摘している。そして、自然保護や野生動物との軋轢等にまつわる問題を多く抱えた現代において、こうした人と野生動物との関わりを相対化する視点に満ちた方法論は、より重要であると主張している。さらに第四の考察として、そうした川村ノートにみられる「霊長類学の関心を軸にしながらも、自然と人間の関係の諸相をつぶさに記録する」(p.108)という生態人類学的アプローチが、当時“人類学を専門としない”研究者によって黎明期を迎えていた生態人類学の自由で闊達な風潮に刺激され生み出されたものであることを指摘している。また、そうした学問的刺激に加え、川村が、

屋久島の猟師と「動物のことがおもしろくてたまらない」(p. 109) という感覚を共有していたことで、猟師への関心や尊敬とそれに基づく生態人類学的なものの見方に結び付いたと論じている。

続いて第2章では、川村ノートの分析だけでは明らかにならなかった狩猟活動の詳細や地域社会における猟師の位置づけ等について明らかにするため、川村ノートに登場した猟師の親族や知人・本人44名に対して服部氏・小泉氏がおこなった聞き取り調査の結果とその考察を示している。

後継者による語りからは、まず慣習的な猟区や猟期と狩猟規則、猟法、捕獲数などといった狩猟活動の詳細が明らかになる。猟師たちが、集落ごとの猟区内にそれぞれのなわばりを持ち、個別に猟具(主にワナ)を工夫しながら猟をおこなっていた様子をうかがい知ることができる。続いて、食用や薬用としての野生動物利用や、野生動物の販売実態についての語りが取り上げられ、川村・伊谷が始めた京都大学への実験用サルの供給事業が、1950年代から1960年代後半にかけて大きな経済的利益を生み出していたことが指摘される。また、猟師が山に対するそれぞれの信仰に基づいて儀礼をおこなっていたことや、屋久島ではサルや猟に対する禁忌が存在していたことが明かされる。

著者は、こうした語りから、屋久島の集落において、猟師が多面的かつ異質な存在であった様を浮かび上がらせている。第一に、猟師は嫉妬や羨望的であった。それは、猟師が戦後の食糧難の時代にタンパク源を入手

しやすい立場だったのみならず、戦時中から軍用として使われたイタチの毛皮への需要や、前述した京都大学やその他動物園等の生きたサルへの需要によって、1960年代後半頃まで島外との取引から多額の収入を得ていたことに起因すると論じている。一方で、猟師は野生動物が畑に侵入するのを防いだり、山林の監視役として森林資源を採取しようとする侵入者を防いだりといった、外敵から集落を守る役割も担っており、頼りになる存在としての一面ももっていたと指摘している。また、さらに猟師を異質な存在にした要因として、猟師がもつ野生動物に関する豊富な経験や知識と、神や物の怪がいる聖域である山に入っていくことへの畏怖の念があったと論じている。そして、こうした畏怖や嫉妬・羨望などが、屋久島の猟に対する禁忌に結び付いたと推測した。

また著者は、屋久島の猟師に島外出身者やその子孫が多い点にも注目している。そして、1950年代の猟師の社会的位置づけに対するまとめとして、よそ者である猟師たちが屋久島の山を舞台に活躍できたのは、①島内外からの野生動物に対する高い需要によって、猟師が生活基盤を築けたこと、および、②集落の多くの人々にとって、その険しい自然環境故に簡単にアクセスできない場であった奥山で、野生動物や侵入者から集落の畑や山林を防御する猟師の存在が必要とされたことの2点が大きな理由になったと論じている。

以上が本書の概要であるが、ここからは評者の立場から、いくつかのコメントを述べたい。

まず本書の魅力的な点は、川村ノートに記された情報を細部に至るまで丁寧に読み解き、さらに著者や研究協力者による聞き取り調査によってそれらの情報を補完したことで、1950年代における屋久島の猟師の生き様を見事に描き出した点である。川村の関心の広さを反映して、川村ノートの情報は非常に多岐にわたったが、著者はそれら膨大な情報を解説し、ひとつひとつ丁寧に分類し、自ら得た情報と合わせてそれぞれの因果関係を位置づけ、全体を描き出すことに成功している。これは、単にフィールドノートの内容を機械的にテキスト分析するだけでは得られなかった成果であり、本研究の優れた特徴である。著者は、川村が猟師たちを尊敬し、同時に猟師たちに魅了されていたと述べているが、著者自身も同様に、川村ノートを通じて出会った川村・伊谷や屋久島の猟師たちに魅了されていたのではないかと考えられる。そうした著者の姿勢が、本書の挑戦的な試みを可能にしたのではないか。

また、1950年代に“よそ者”的存在であった猟師の社会的立場を鋭く描き出している点も興味深い。屋久島において、現在も移住者は地元の人間と区別されており、集落社会において異質な存在としての側面を保持し続けていると同時に、少子高齢化が進む集落社会の活性化に向けて期待される存在でもある。こうした“よそ者”の位置づけは、島外との関係やそれを受けた島内の経済状況、島民と自然との関わりの変容といった、その時代の屋久島という地域がもつ文脈を最も鋭く切り取っており、大変重要であると考えられる。

一方で、俗に「海に10日、山に10日、里に10日」(p. 325)といわれていたほど島民が多様な生業をもっていた屋久島において、猟師の異質性に対するより詳細な検討をおこなう余地があるように思われる。それによって、本書の到達点からさらに議論を深めることができるだろう。評者は自身の調査の中で、屋久島の農家が、子どもの頃から遊んできた山での経験や今では地図にない山中の地名、素潜り漁の中で身につけた海中の地形や魚の習性に関する知識等について豊かに語る姿を目の当たりにしてきた。その中で、屋久島の人々が軽やかに生業を乗り越えながら、驚くほど豊かな自然環境にまつわる経験や知識を蓄えていることを実感してきた。このように、本書で描かれてきた屋久島の猟師のあり様について、狩猟以外の生業にも視野を広げ、狩猟を生業とすることに由来する部分と、屋久島全体に共通する自然との距離の近さに由来する部分のグラデーションをさらに検討することで、猟師の異質性や屋久島という地域のおもしろさがより際立つ可能性がある。

また、屋久島における現代の狩猟は、野生動物による農作物被害・生活被害対策としての有害駆除という側面を強くもつようになった。こうした新たな狩猟に対する需要との関わりの中で、70年前の屋久島に描かれた猟師の経験的な知識や狩猟のあり方、猟師の社会的位置づけがどう変容していったのかを問うことは、現代的な人と野生動物との間の問題解決のために非常に重要である。評者自身の課題であるという意味も込めて、現在の屋

久島における狩猟研究が新たな重要性をもって展開することを期待したい。

田中雅一・石井美保・山本達也編. 『インド・剥き出しの世界』 春風社, 2021年, 456 p.

菅野美佐子*

本書は、南アジア各地で生起するあらゆる形の暴力と、それに晒される人々の被傷性を、22名のフィールドワーカーが目撃し、共感し、熟思し、その経験を書き綴ったエスノグラフィーである。タイトルにふくまれる「剥き出し」が強烈な存在感を放つように、本書には中絶、誘拐、老衰、差別、暴行、レイプ、殺人、自殺といった南アジア社会の厳しい現実を突きつけるようなキーワードが散りばめられている。だが、それぞれの書き手が織りなす民族誌には、圧倒的な暴力を眼前にした人々の悲傷や恐怖、絶望だけでなく、そこからの回復や希望の営為も描かれることで、読み手はそれぞれの物語に次第に引き込まれていくのである。

剥き出しの世界と「愛」の所在

序章「インド・剥き出しの世界にむけて」(田中雅一)では、唐突にアガンベンの思想と園子温の世界観が、本書を貫く問題意識の軸として登場する。この導入に最初は戸惑いを隠せないのだが、本書を読み進めるにつれて、一見ちぐはぐな2つの視角がどことな

く重なりあう瞬間が垣間見えてくる。アガンベンが想定する「ホモ・サケル(聖なる人間)」は、法的保護から投げ出されるがゆえに殺されても誰も殺人の罪に問われず、しかし祭儀上の犠牲として意味のある死を遂げることも許されない[アガンベン2003]。そこにあるのは意味のある世界(ポリス)から追放され、ただ生きているだけの無機質な生(ゾーエー)である。他方、園子温監督の映画『愛のむきだし』では、行き過ぎた愛の形が暴力的に立ちあらわれ、生の形式としてのビオスと暴力に剥き出しにされたゾーエーの間で、「液化化した生」とでもいうような激しい生きざまが滑稽に描き出される。本書において、この作品が引用されるのは、日本のある家族の一場面を見れば、剥き出しにされた人々の受苦や愛の経験が、南アジア社会のみでなく、この世界のあらゆる景色に遍在していることを読者に納得させるためであろう。ロシアによるウクライナ侵攻の犠牲者たち、アメリカにおける中絶禁止法やブラック・ライブズ・マターにみる差別や暴力、ロヒンギャやクルド人など政治的圧力によって増える難民、そして日本ではコロナ禍で増加する生活困窮者や、超高齢社会のなかでケアから取り残される高齢者たち。田中がアガンベンの言葉を引用して、われわれ誰しもが「潜在的にはホモ・サケル」であると示唆するように(p.9)、人間はみな被傷性を帯びた存在であることを想起させることで、南アジア社会への共感を呼び起こす仕掛けが施されているといえる。

* 青山学院大学